



五月の風

山尾三省の詩のことば

山尾三省

野草社



序にかえて

詩は、いずれも私という自我、あるいは個性がその境界を失って、世界と溶け合い、ひとつになった時に訪れる静かな喜びを記録したものです。

むろん私という自我は、その特性として、日常の多くの時においてむしろ世界と対峙し、世界と仲違いしたり拒絶したりして暮らしているのですが、時にはまた同じ日常の中でそれが消え失せ、世界とひとつになる有難くうれしい時間も訪れてきます。

私という自我が消えて、世界とひとつに溶け合った時には、

世界は私の外に存在する対象物であることを止めて、より深い私自身であったり、より喜びを秘めた私であったり、より静謐せいひつな私である性質そのものになります。

私の詩はすべて、誰もが日常生活の中で体験しているそのような時を、逃がさないように記録したものといえるでしょう。

28	旧盆会	28
30	栗の実	30
32	台所で	32
34	夕方(二)	34
36	漢字	36
38	新月	38
40	藪啼きうぐいす	40
42	畑で	42
44	高校入学式	44
46	海	46
48	朴 <small>（き）</small> の花	48
50	花二題	50
52	山 人を見る	52
54	小雨の中で	54
56	黄金色の陽射しの中を	56
58	帰ってくる	58
60	シーカンサ	60
62	いろいろ焚き	62
64	梅月夜	64
66	海から来るもの	66
68	すみれ草	68
70	夜明け前	70
72	スモモと雲	72
74	海沿いの道で	74
76	夏の海	76
78	カボチャ花	78
80	台風	80
82	洗濯物	82
84	カッコウアザミ	84
86	センリョウ マンリョウ	86
88	悲しい替え歌	88
90	青い花	90
92	四月六日	92
94	高菜漬け	94
96	祈り	96
100	アザミ道	100
102	雨の歌	102
104	アオスジアゲハ	104
106	山に住んでいると	106
108	台風の後で	108
110	石	110
112	野菜畑	112
114	樹になる	114
116	肥やし汲み	116
118	じゃがいも畑で	118
14	い・の・ちの世界 和田重正	14
3	序にかえて	3
18	I 新月	18
22	あぶらぎりの花が咲いて	22
24	夕方(一)	24
26	畑から	26

214	梅二輪	150	山呼び
212	木洩れ陽	148	灰 ということ
210	善光寺	146	童心浄土
208	白露節	144	月夜
206	貝採り	142	自分の樹
204	夏の朝	140	のうせんかづら
202	真昼	138	風の過ごし方
200	青葉	136	カメノテ採り
198	海とカラスノエンドウ	134	青草の中のお弁当
196	オリオン星	132	山
194	流木拾い	130	帰命
192	雨あがり	128	大きな石
	III 親和力	126	冬至
188	ゆつくり歩く	124	白むくげ
		122	三光鳥
		120	海如來
240	真事	152	白木蓮
239	單純な幸福	154	お話
238	ヒナギキョウ	156	キャベツの時
237	蟻一匹	158	まごころはごっこに
236	属する	160	深い星空
235	白木蓮	162	白露
234	雨夜	164	金木犀
232	童翁心	166	沈黙者
230	伯耆大山	168	地蔵 その一
228	安心な土	170	地蔵 その二
226	神の石	172	一日暮らし
224	テリハノブドウ	174	切株
222	森歩き	176	かぼちゃ花
220	ふしぎがいっぱい	177	散文 七月の月
218	春	184	洗濯物干し
216	雨水節	186	十四夜

242 場所
244 風呂焚き
246 ツワブキの花
248 星
249 心
251 小^{くろ}さ 愛^{かな}さ
253 親和力
255 石のはなし
257 六つの知慧
258 暮参り
260 秋の青い朝
261 冬至節
262 お正月
264 真冬
266 白木蓮の春
268 春の雨

296 散文 窓
298 風
300 散文 散髪
302 爪きり
304 散文 ターミナルケア
306 いったらっしゃーい
308 散文 生死^{しやうじ}

270 ふるさと
272 海へむけて
273 土に合掌

IV 祈り

276 土の道
278 白露^{はくろ}節
280 この世界という善光寺
282 無印良品
284 大寒の夜
286 わらって わらって
288 散文 内は深い
290 尊敬^{リスペクト}
292 散文 ウグイスの啼声から
294 足の裏踏み

V 単行本未収録作品

312 菜の花
314 春

*

316 解説 大地と火といのちのことば
—— 詩人・山尾三省の遺言 若松英輔
329 所収一覧

付録 朗読への招待

この本について

この本は、くだけ社から発行された詩人・山尾三省（一九三八～二〇〇二）の詩集『新月』『三光鳥』『親和力』、および雑誌『くだけ』に発表された詩作品を集成したものです。

五月の風 山尾三省の詩のことば

い・の・ち・の・世・界*

流されて
花をみながら
月をながめて
世の中を泳がずわたる
その時、その時を
力いっぱい生きているだけ
その時、その時の
縁にしたがって、生きているだけ

自分の手柄でもない
誰のお陰でもない
ただこうなっているだけ
誰はばかることなく

言い放つことのできる
この
い・の・ち・の・世・界

和田重正

*この作品は、教育家の和田重正（一九〇七―一九九三）が山尾三省の詩集『新月』の序文として書いた詩です。



I

新月

いろりを焚いて

いろりを焚いて

どろどろと ジャムをこしらえる

リンゴジャムを こしらえる

高松の

原子力発電所を止めさせる集会で

出会った

ひとりのりんご作りが送ってくれた その大切なりんご

新しい人間の文化を

なをも

なをも夢見つつ

大地は神と 確信を深めつつ

山は神と 確信を深めつつ

リンゴジャムを こしらえる

いろりを焚いて

どろどろと ジャムをこしらえる

一九八八年の

リンゴジャムを こしらえる